

非核の政府を求める石川の会 会報

# 非核・いしかわ

## 原水爆禁止世界大会に参加して

常任世話人 尾西 洋子

被爆から六六年。八月七日被爆地長崎に足を一歩踏み入れた時、緊張感が走りました。

今年の世界大会は、昨年五月のNPT(核不拡散条約)再検討会議で核保有国を含む一八九の国々が全会一致で合意した「核兵器のない世界へ」を実行に移す次へのステップ「核兵器禁止条約の交渉開始を」(賛成が史上最高の一三三カ国に―日本政府は決議に棄権)に踏み出していることと、東日本大震災と福島第一原発事故を目的あたりにして「フクシマ」が世界的な問題になっていの中で、内外の新しい国民の不安と関心に応える歴史的な大会となりました。

二五カ国八八人の海外代表―国連、各国政府、自治体と草の根の反核運動の共同の場として世界大会は大きな力を発揮しています。

七日の開会総会で、二月に原水協が呼びかけた新たな国際署名が五四万八二四四筆。六九一人の自治体首長(石川県八氏)、四九六人の地方議会議長(石

事務局

〒920-0848

金沢市京町 28-8

石川民医連労働組合気付

Tel 076-251-0014

郵便振替

00760-0-15689

### 非核 5 項目

- ① 全人類共通の緊急課題として核戦争防止、核兵器廃絶の実現を求める。
- ② 国是とされる非核三原則を厳守する。
- ③ 日本の核戦場化へのすべての措置を阻止する。
- ④ 国家補償による被爆者援護法を制定する。
- ⑤ 原水爆禁止世界大会のこれまでの合意にもとづいて国際連帯を強化する。

川県九氏)も署名に応じたと報告され、第二会場まで埋めた七八〇〇人の参加者の喜びとなり、秋の国連総会に届ける代表の紹介と、国連の正面に積み上げられることも報告されました。

藩基文国連事務総長は世界大会にあてたメッセージで「みなさんが集めた一筆一筆の署名、ひとつひとつの声明、集会そのものを通じて、みなさんは世界で最も残酷な大量破壊兵器をなくすという、発展しつつある歴史的プロセスへ人々の参加を促しています」の励ましは、草の根が世界を動かしていると誇りに思いました。

又、被爆地広島市長が主宰し、長崎市長が副会長を務める二〇二〇年までの核兵器廃絶を求める平和市長会議への参加自治体が一五一カ国、四八九二都市へと広がっていると田上富久長崎市長の報告と「原発は安全神話に、核兵器は抑止力にとりつかれ、思考停止に陥っている。市民社会の力を信じます」と挨拶され、草の根の運動と被爆者の思いを一つに束ねるもので、自治体本来のあり方を実践されていることに頼もしく思いました。

一日目の夜は、石川県代表三七人の内、二〇〇三〇代が七割を占める若者(小学生二人含む)と一緒に「リング・リンク・ゼロ」二〇一一年青年のつどい



県議会厚生文教委員会における「子どもの医療費窓口無料化」を求める要望に対し、木下公司健康福祉部長の答弁は、「現在国においては社会保障と税の一体改革や子ども・子育て支援新システムを検討中である」「国の動向が固まった段階で、市町の意見を踏まえながら今後どうあるべきか検討したい」とどま、県の独自施策が見えてこない。

総務企画委員会では、福島原発事故にかかわり志賀原発の安全性と再稼働を問われた西和喜雄危機管理監は、「原発の安全規制は、基本的には国に権限と一元的な責任がある」「今回の大震災による全国的な影響など、今後の動向を踏まえながら適切に対応していきたい」などの答弁を繰り返したため、自民党県議からも「あなたは、二言目には国の管理のもと、国の検査のもとと、みんな国に任そうとしている」と厳しい批判の声が挙がった。

これでは地元新聞で紹介されていた川柳「指示待ちの上司の下で指示を待ち」である。地方自治体は住民の福祉の増進を図ることを最も規範とすべきなのに。(か)

に参加、大変楽しかった。九条の会の小森陽一さんの進行・二人の青年パネリストと会場からの交流で、はじめはどうなるかと思っていました。『一人は微力だけれど無力ではない』と署名に立ち上がったいく姿、若者の分断から連帯へ乗り越えて行く力にわくわくしました。

二日目の夜は女性のついでで、被爆者の渡辺千恵子さんをモデルにした合唱組曲「平和への旅」、松谷英子さんの「被爆証言」に涙と感動でした。

被災地、岩手、宮城、福島との交流で東京の高校生たちが「体験者から学び、過ちを繰り返させないよう次の世代に伝えたい」と一緒に並んだ時は、何とも嬉しかった。

マーシャル諸島、グアム、フィリピン、ドイツ、アメリカなど一五カ国の海外代表との交流も見事でした。

分科会は、『核兵器廃絶と原発―運動と交流』に羽咋診療所友の会代表と参加。「原発立地県の石川も発言を」と隣県富山の代表から促されて発言。各地の運動は大変参考になりました。

「核」による被害者をこれ以上出してはならない―核兵器廃絶、被爆者援護を一致点とする世界大会宣言で表明したことは両運動を相乗的に加速させ、力になる予感がしています。

被団協代表の「私たちの苦い経験を福島の人たちに味わせたくない、直ちに健康手帳を発行し、住民の健康診断を継続的に行うよう求めた」という報告に「さすが」と思いました。

最後に、世界ではじめて原爆が投下された、八月

六日の広島の平和祈念式典での菅直人首相の「究極的核廃絶」をめざす挨拶には驚きました。

今なお二〇万人を超える被爆者(平均七七歳)の方々が放射能に苦しみながら「生きている内に核兵器のない世界を実現したい」という願いを踏みにじるものであり、歴史の逆行です。被爆国の首相としての資格が問われます。情けない、許しがたい、非核の政府を一日も早くという思いを新たにした長崎の世界大会でした。送りだしていただいてありがとうございました。

\* \* \* \* \*

非核の政府を求める石川の会は長崎市で開催の原水爆禁止世界大会に常任世話人の尾西洋子氏を代表派遣しました。派遣費用の募金をお願いしましたところ三三人から六万七〇〇〇円が寄せられました。心よりお礼を申し上げ、ご報告いたします。

### 第二三回総会記念講演

「二一世紀国際社会における危機と挑戦

〜北アフリカ・中東情勢を中心に〜

名古屋大学法学部教授 定形 衛さん

昨年の年末から今年にかけ、北アフリカから中東地域において、民衆による長期独裁体制への異議申し立て、民主化をもとめる一連の動きがみられました。これらの地域ではチュニジアのベン・アリ大統領が二三年間、エジプトのムバラク大統領が三〇年、リビアのカダフィ大佐が四一年、イエメンのサレハ大統領が北イエメン時代から三三年といったよう

に、長期独裁政権が維持され、国民は高い失業率、富の偏在と経済的困窮、加えて賄賂と縁故主義の政治に不満を募らせてきました。

北アフリカ・中東では、イスラエルとアラブの中東和平が国際政治の焦点であり、チュニジアからアラビア半島のイエメンさらにバーレーンにいたる地域が、共時的な視野のもとに国際社会から注目されることはほとんどありませんでした。また、今回の民主化運動は、西側世界から「過激派」、「原理主義者」と烙印を押されてきた暴力をともなう抵抗運動とは異なり、広範な民衆を動員しての非暴力的なものでした。民主化運動のその後の展開は、政権側の受け止め方や国際社会の対応により多様な道筋をたどるのですが(大統領の退陣を成功させたチュニジアやエジプト、依然として独裁政権を維持するリビアや王政のつくづくバーレーン、内戦状態に至ったイエメン)、きょうは、二一世紀の国際政治を展望するなかで、これらの民主化運動を突き動かしたものの、またその現代的意義について考えてみたいと思います。

### ◎長期独裁政権退陣・民主化と

貧困の解決を求めジャスミン革命・・・

民主化運動はチュニジアでは、その国花の名から「ジャスミン革命」とよばれ、北アフリカ・中東についても広くこの名称が使われることになりました。二一世紀に入り、旧ソ連や中東の民主化革命はしばしば花の名や色などを冠してよばれてきました。グルジアの「バラ革命」(二〇〇四年)、ウクライナの「オレンジ革命」(二〇〇四年)、キルギスタンのチュリップ革命(二〇〇五年)、レバノンの「杉

革命」(二〇〇五年)、イランの「緑の革命」(二〇〇九年) などです。

こうした名称で呼ばれるのは、今回の民主化運動が、近代以降の市民革命、社会主義革命さらに民族独立革命などとは異なる担い手、スローガンによって実行されてきたからです。そこでは、「自由と平等」や「労働者階級の解放」、さらには「反米、反帝国主義」や「反グローバリズム」が前面に掲げられることはありませんでした。民衆は、武器をもつことなく街頭に出、現政権の退陣と生活の窮状を訴えたのでした。人びとは「もう沢山だ」「日常生活を返せ」「大統領は出て行け」のプラカードを掲げ、シユプレヒコールを浴びせました。エジプトでは、アラビア語の Kitaya (もう十分だ) やチュニジアではフランス語の degage (外へ出て行け) などの文字がデモで躍りました。

マスメディアは、この二一世紀の民主化革命を「花」や「色」で表現しますが、私たちは、冷戦期に長期政権を作り出し、それを今日まで支えてきた各国の政治、および国際社会とのかかわりの構図を見失ってはならないと思います。民衆から日常性を奪い、生活を脅かしているものは、誰なのかをはっきり見据えなければなりません。階級的対立、資本と労働の抗争と矛盾は、九〇年代の東欧革命とソ連邦の崩壊、社会主義国家の体制転換と市場経済への移行のなかで、隠蔽され、その実態は今日見逃されているかのようです。九〇年代以降、西側世界を中心に「冷戦の終焉」、「社会主義の終焉」が語られますが、冷戦や社会主義における理論と実際、政策と社会構造の関係性に目を遣るとき、冷戦や社会主義

の何が終わって、何が終わっていないのか、断絶と連続の区別すら明確にされることなく、私たちは二一世紀を迎えた感があるのではないのでしょうか。

◎武器を持たず、数万、数十万人が民主化と貧困の解決訴え

北アフリカ・中東の民主化運動は、かつてのような民族の解放と自由をもとめる戦線(フロント)という形態はとりませんし、武力抵抗を全面に掲げるものでもありません。フロントを形成して、激しく衝突し対決というより、民衆はネットワーク的、フオーラム的な形をとって運動に結集しています。また、運動を指揮し鼓舞する、宗教的指導者や理論的支柱、革命の闘士といったリーダーも不在のままです。こうした中で、民衆による下からの勇氣と決断に支えられた非暴力と市民的不服従の闘いがうまれたのです。

今回の一連の民主化運動、とくにエジプトやチュニジア、また前述したグルジアやウクライナ、セルビアの民主化運動に影響を与えた書物にマサチューセツ大学ダートマス校教授の G・シャープによる「独裁から民主主義へ」(From Dictatorship to Democracy) を取り上げておきたいと思います。ミヤンマーのアウンサンスーチー女史の非暴力民主化運動に触発され、一九九三年に出版され、三〇カ国余の言語に翻訳されています(ただし、邦訳はありません)。M・ガンジーやアメリカの詩人 H・ソーローから強い影響を受けたシャープは、ミヤンマーのことに限って論じるのではなく、独裁体制を「非暴力の手法」によって打倒するに当たっての考え、戦術を具体的に述べています。

そこには、わかりやすいスローガンやシンボルとしての色の使用、敵の暴力に乗じられることなく、デモやボイコット、サボタージュで柔軟かつ非暴力で対抗すること、また、独裁政治の弱点や盲点などを、百九八項目にわたって非暴力抵抗の手法を指示しています。多くの参加者は、これらの項目が書かれた部分をポケットに入れていたといえます。

しかし、大切なのは、今日の北アフリカ・中東を取り巻く国際政治とグローバル経済の現段階の本質を捉えることです。冷戦後の国際政治は、社会主義陣営の崩壊によって二極対立は終わったのですが、二極を前提とした三つ目の世界「第三世界」はどのように捉えられてきたかという点、第三世界や南北問題は、この二〇年ほどの間、冷戦の終焉と経済のグローバル化の認識のもとで、忘れ去られ、葬り去られていたのではないかと考えています。

◎非暴力と市民的不服従のたたかい

一九七〇年代、北アフリカ・中東の多くの国は、石油戦略、資源ナショナリズム、国連における新国際経済秩序の樹立宣言など、第三世界の雄であり、北の先進諸国を突き上げる南の世界のリーダーたらしまりました。イランを失った八〇年代、アメリカはエジプト、サウジアラビア、イスラエルを拠点とし、親米独裁体制の構築を図ってきた。さらに冷戦後は資本のさらなるグローバル競争のなかで、米国の戦略に組み込まれた独裁体制は、国民経済の疲弊と腐敗政治の横行、民衆の日常生活の崩壊と失業率の上昇をもたらしたのです。

このように抵抗のシナリオを失い、オイルダラーに安住した北アフリカ・中東諸国にあって、民衆は、

冷静な現実主義的判断と勇気をもって政権打倒に挑んだのです。そこには話し合いによる妥協、交渉の余地はなく、徹底した非暴力抵抗と人間の尊厳性をかけた民主化への確固たる行動が繰り広げられたのでした。それが、今回の民主化運動の核心にあったといえます。

今日の新自由主義的な国際主義が喧伝されるなかで対立軸は何なのか、矛盾はどこに潜んでいるのか、支配階級、国際資本はどのような構造で利益を獲得しているのか、石油確保、中東和平、対テロ戦争など二一世紀国際政治の最大の焦点が依然この地域を巻き込んでいるゆえ、今回の民主化運動の現代的、世界的意味を正確に読み取る必要があります。かつて独裁者におののき、抵抗する力を失い、恐怖心からひれ伏してきた民衆は、今回はこれまで述べたように、勇気をもって立ち上がり、独裁を恐れない運動を展開してきました。イデオロギーや宗教に依拠するのではなく、普通の生活の要求、日常性の確保を基盤にすえて力を結集し、それを非暴力という形で維持し、より強固な形にしたのです。リーダーがいるわけでも政党組織で支えられているのでもなく、不服従、非暴力の運動によって、権力を恐れず、人間としての尊厳性に目覚めて、立ち上がったのです。

ア海域への海外派遣など米国の世界戦略への加担、新自由主義に基づくグローバル経済の推進、国民不在の政治など、今回立ち上がった民衆の掲げる問題と無縁な位置にいるわけでは決してありません。私たち日本人が、国内政治、国際社会において問われている人間としての尊厳性とは何であるうか、現在の私たちが、権力をおそれず、非暴力抵抗の方法で成し遂げるべき問題はなにか、そうしたことを真に見つめ、考えなおす必要性を、今回の民主化運動が問いかけているのではないのでしょうか。彼らの運動から日本の現状を考える想像力が、何よりも求められているように思います。

以上で報告をおわりますが、意を尽くさないとこども多々あったかとおもいます。質問への回答を通じて補えればと考えています。

**【質問・回答】**

**Q：** ジーン・シャープの本についても少し教えてください。

**A：** 日本においてこの本はあまり注目されていませんでした。三十カ国余の言語にすでに翻訳されているのですが、まだ邦訳はありません。内容的には、「独裁政治には必ず弱点がある。決して一枚岩的なものではない。独裁者の取り巻きは、気分を損ねないようにな正確な情報を与えないから、必ず対応を誤る。そこをしっかりと見ておけ」とか「新たな情勢の展開に独裁制は対応できない」、「独裁政治を恐れるな。その力に妄想や錯覚をもつことはない」などと述べられています。もちろん民主化運動の戦術として、独裁政治の弱点をつくことは大切ですが、その戦術の基本に独裁政治の矛盾と本質を見据え、また、

西側先進諸国が、貿易と投資先として地域の安定（平和ではない）のためにそうした政権を温存、維持してきたことも忘れてはなりません。また、先進諸国が地域の安定と称して、民主化と市民の保護を大義に掲げ、「人道的介入」や「保護する責任」といった形で内政に介入してきたことにも批判的であるべきです。どのように戦術を繰り広げるかの前に、敵である独裁政治の本質と国際社会の加担といった側面を明確に見据える必要も大切であると思います。

**Q：** 今回の民主化運動の展開におけるイスラムと政治体制について教えてください。

**A：** 今回の動きではイスラムという側面よりも、独裁政治の停止と生活の確保が前面にかかげられています。それはアラブ、イスラム圏の問題というより、冷戦後のグローバリゼーションのなかでの国内における富の偏在、政治腐敗、長期独裁政治の排除を目標にしていたのです。しかし、それをなう政党や政治勢力が力を十分に備えていたのではなく、人間存在の根本にある、尊厳性の確保と生活の保障で民衆は結集したのです。ただ、こうした要求を、長い独裁政治のあとの政治体制のなかで、どのような形で実現していくか、現実的政治におけるリーダーシップの確保と民衆の粘り強い非暴力抵抗へのさらなる決断と行動がますます大切になっていくことでしょう。それが民主政治実現への真の道であり、また唯一の道であるように思われます。

## 二〇一一年国民平和大行進

## 全自治体を行進する

常任世話人 内藤 晴一郎

今年の平和行進は、六月一二日輪島市内から始まり、一週間能登半島の全自治体を行進。一八日には富山県行進団から行進旗を受け継ぎ加賀地方の全自治体を行進、二四日福井県行進団に渡しました。毎年この時期は梅雨の季節ですが、津幡町と小松市で気にならないパラパラ程度で行進中天候に恵まれました。

今年の特徴は、第一に、昨年・一昨年に引き続き全自治体を行進することが出来たことです。地元の人たちや実行委員会の協力のおかげです。

第二に、全自治体を訪問し、ほとんどの自治体からメッセージや激励の言葉を頂いたことです。市長・町長さんはじめ自治体の職員一六三人が歓迎集会や出発集会にご参加いただきました。ペンントや署名、被爆者援護連帯募金などの協力も沢山していただきました。残念ながら金沢市、小松市、珠洲市からは職員に参加していただけませんでした。

第三に、各地の実行委員会が、会議を開きコースの選定、人集め、盛り上げる工夫等をされました。ティッシュペーパー、風船、うちわ、横断幕、のぼり旗の他、ぬいぐるみ、歌声、タンバリン、たて笛演奏など耳と目に訴える行進もありました。

第四に、行進者の呼びかけに沿道の人が手を振って応え、募金・署名・折り鶴などを届けてくれる人が各地でありました。これは実行委員会の事前のチ

ラシ配布などの取り組みの成果です。

第五に、諸団体の全面的な協力を受けたことです。運転手をふくむ宣伝カーのお世話をいただいた県労連、ほとんどのコースに多くの職員や会員の参加をいただいた民医連、新婦人の会、年金者組合など多くの団体のご協力ご支援をいただきました。

第六に、新聞報道がありました。北陸中日新聞が行進前の事前報道をし、北国新聞が輪島市・津幡町の二回、しんぶん赤旗が津幡町・金沢市の二回取材報道がありました。又、中能登町ではケーブルテレビが撮影し町内に放映されました。

第七に、平和集会を城北病院、卯辰山、寺井病院の三カ所で行いました。

第八に、行進参加者は、延べ九六八人、自治体職員一六三人、平和集会二九五五人、計一四二六人となりました。通し行進者櫻井正男さんとともに、県内通し行進者の藤田克彦さんは四年続けて行進されました。

署名は、自治体の住民署名は二二〇二筆、六カ所の行動で四一七筆、合計二五一九筆です。被爆者連帯募金は十八万八九二三円でした。署名募金は一万一一〇〇円です。輪島朝市での簡易鉛筆添付の署名用紙配布は効果があり一六七筆も集まり、今後に生かしていきたい。

「核兵器全面禁止のアピール」署名は、泉谷満寿裕珠洲市長、八十出泰成内灘町長、藤井敬一羽咋市議会議長、津田達宝達志水町長、坂井毅川北町議会議長、北村成人野々市町議会議長が新たに署名をされました。これまでの小泉勝志賀町長、石川宣雄穴水町長、栗貴章野々市町長、杉本栄蔵中能登町長、

油野和一郎かほく市長、谷口正一津幡町議会議長、大林吉正七尾市議会議長、久田良平能登町議会議長、田中正文志賀町議会議長、坂井幸雄中能登町議会議長、杉本成一かほく市議会議長、西野昇吾元川北町議会議長、西田治夫元野々市町議会議長と併せますと一九人の方が署名されています。

「非核日本宣言」の賛同署名には、酒井悌次郎能美市長、明福憲一能美市議会議長が新たに署名されました。

NHK広島が二〇〇七年から毎年「ヒバクシャからの手紙」を募集しています。この岩佐幹三さんの原稿は二年目の二〇〇八年に応募したもので、あの日亡くなった母と妹にあてた手紙の形式をとったものです。同年八月六日早朝、その一部分が六分間程朗読されました。

## 母と妹への手紙

千葉・岩佐 幹三

母さん、好っちゃん(好子)。今年も八月六日やって来たね。

被爆から六三年がたった今でも、僕は、原爆で連れ去られた母さんたちの命を甦らせて、手を取り抱き合いたいという空しい願いを持ち続けているんだ。

母さん、僕は、先日何回目かのつらい夢を見たよ。頭上でグワンという爆発音がして破壊し尽くされた町並みが現れた。それを見た僕は、「今度こそ母さんを助けるぞ」と叫んだ瞬間に、目がさめた。

その時の悔しさは、言いようがなかったよ。母さんたちの死は、戦争だから仕方がなかったという考え方は、絶対に許せない。

でもね、当時の僕は、一六歳の中学生、全くの軍国少年だった。あの年の五月病気で亡くなった父さんや母さんを、本当に困らせたんだらうね。日本が起こした一五年戦争で、アジア諸国で二〇〇〇万人、日本でも三〇〇万人の尊い命が失われた。その戦争のお先棒を担いだ一人だったんだからね。僕たち若者が、敵の軍艦や戦車に体当たりして戦死すれば、家族は守れるし、後はどうにかなるだろうと浅はかにも死ぬことだけ考えていたんだ。

それなのに死んでも家族を守るべきはずの僕が生き残り、守られるべき二人を守ることができなかった。戦争って何だったんだらう。軍国少年って一体何だったんだらう。

その反省と謝罪の気持ちをこめて、今この手紙を書いているよ。

一五年にわたる戦争、特に敗戦の年は、僕たちの生活は耐乏状態の限界をこえていた。戦争に勝つためにがまんせよと、すべて軍事優先、衣服も食料も配給制度になり、それも遅配続きだった。お金があつても何も買えなかった。本当につらかったね。父さんがいないわが家では、食料の算段もできず、八月はじめには米ビツも空っぽだった。母さんは、「少しでも食べて死ねば顔色もいいよ」と言つて、わずかに残つていたお米を炊いて茶わんに半分ずつ三人で食べたよ。あれが水盃になったのかな。母さん覚えてる？

だが母さんは、八月四日か前日の五日か、近所の

小さな店で、醤油のためのひじき一皿分を、僕たち兄妹のために持ち帰ってくれたんだ。自分も空き腹なのに、一緒に出された大豆の豆かすをひいたコーヒー(?)汁を飲んだだけで。それを僕たち兄妹は、むさぼるように食べてしまったが、親なればこそ、決して忘れてはいないよ。

母さんは、そんなことまでして僕たちを守ってくれたのに、僕は、何もできなかった。だから今になつて戦争がもう少し早く終わつていたら、せめて少しでも銀シャリ(白米)を食べさせてあげられたのになんて、時々こたくを並べているんだよ。でもね、母さんたちの死は決して無駄にはしない。戦争も、原爆も核兵器もない世界のため頑張っているよ。

あの年、昭和二〇年、東京、大阪、名古屋をはじめ全国の大中小都市が次々と米軍機によつて焼土となり、沖繩も陥落していた。日本の戦争する余力は尽きていた。それでも国は戦争を継続し続けていた。そして八月六日がやつてきた。

あの日は、動員中の工場が電休日だった。八時一五分少し前、僕は、自宅(広島市富士見町)爆心から一・二km)の庭にいた。飛行機の爆音が聞こえて間もなく、激しい爆風の衝撃で、地面にたたきつけられた。そこはやわらかい畑地だったから大した傷も負わなかった。五〇cmほど右にいたら庭石にたたきつけられて即死だっただらう。家の前のバス通りを挟んだ向かいの家の屋根の陰になつて、奇跡的にやけども負わなかった。

一瞬にして崩壊した広島島の町並み、母さんは、崩れ落ちた家の下敷きになつてた。「母さん！」と呼ぶと、屋根の下から「ここよ」という声が聞こえ

た。「ああ良かった。生きていてくれたんだ」とその瞬間は安堵の胸をなでおろしたんだ。しかしその喜びも束の間だった。屋根板をはがして逆立ちをするように顔を突っ込んだ目の前には、家のコンクリートの土台の上に大きな梁が重なつて、行く手をはばんでいた。わずかな隙間から一mほど先に仰向けに倒れている母さんの姿が見えた。つむつた目のあたりから血が流れていた。どこかをひどくうちつけたのか、何を話しても目を開けず、顔をこちらに向けようともしなかった。「こつちからはもう入れんよ。そつちで動けん」と聞くと、「左の肩の上を押さえている物をどけてくれんと動けんよ」という答えが返つてきた。

別の方から掘り出したが、なかなか進まない。そのうちに爆風の吹き返しの火事嵐が物凄い勢いで迫つてきた。火の粉がふりかかってくる。気が気でない。「母さん、駄目だよ。火事の火が近づいてきたよ。こつちからはもう側まで行けんよ。」悲鳴に近い叫び声をあげた。外にいる僕でさえ何が起こつたかわからないのだ。まして家の下敷きになつて周りが見えない真つ暗な中では不安というよりも恐怖心で一杯だったらうね。でも母さんは、「そんなら早よう逃げんさい」と言つてくれた。

それなのに気も動転していた僕は、「母さん、ごめんね。父さんのところへ先に行つていてね。僕も、アメリカの軍艦に体当たりして、後から行くからね。」何という不遜な親不孝の言葉だらう。しかもその後「好ちゃんが大きくなつたら、いいところへお嫁にやるからね」と言つたんだよ。すぐ後から行くと言いながら、妹が大きくなるまで生きると言つた

んだ。死別の際に母さんを裏切る言葉を告げただよ。そして八〇歳近くまで生き延びているんだよ。母さんへの罪の意識は一生抱いていくよ。

母さんは、死を覚悟したのか「般若心経」を唱えだしたね。僕は、その声に後ろ髪を引かれながら、原爆の業火で生きながら焼き殺される母さんを見殺しにして逃げたんだ。二〜三日後家の焼けあとに積もった灰の中を探したら、母さんが倒れていた場所から遺体らしいものを見つけ出すことができた。

それが母さんだったんだ。でもそれは人間の姿ではなかったよ。母さんは小柄な女性だった。まるで子どものマネキン人形にコールドタールを塗って焼いたような油でずるずるした物体だった。母さんはあんな姿で殺されたんだね。人間としてではなく、「モノ」として殺されたんだ。悔しい。本当に悔しい。

あの日比治山橋近くの土手で野宿した僕は、翌日紙屋町から半ば破壊された相生橋まで来て、突然絶望感におそわれた。それまで被害は広島東部地区だけだと思っていた。橋の上から見渡せる西部地区も同じように原爆焼け野原になっていた。好つちゃん(好子)は、あの年あこがれの県立第一女学校に入学できて、張り切っていたね。でもあの日は、土橋付近の建物疎開の後片づけに動員されていたんだ。相生橋から見ると、すぐ目の前じゃない。「あつ！好つちゃんもやられたんだ。」そう思うと頭の中が真っ白になった。避難先になっていた安佐郡緑井のかおる叔母さん(母の妹)の家にも、あんたは来ていなかった。好つちゃんたちまだ二〜三歳の男女中学生約五〇〇〇人が、青春の喜びも悲しみも知ることなく死んでいったんだ。戦争が招いた原爆地

獄の悲劇は決して繰り返してはならない。

その日からもう生きていくはずのない好つちゃんを探す兄ちゃんの放浪の旅が始まったんだ。土橋己斐、江波、草津、五日市までどこをどう歩いたか全く覚えていない。毎日とは言わないが、ただ夢遊病者のように歩き回ったんだ。あれは、もしかして原爆被害特有の「ぶらぶら病」の一種の症状だったのかもしれないね。

そしてちょうど被爆から一カ月たった九月六日、急性病状が出て病床に臥すことになった。かおる叔母さんのおかげでたまたま近所に疎開していたお医者さんから高額な注射治療を受けられて、また奇跡的にも回復できたんだ。そのことが契機になって、僕も被爆者なんだと自覚するようになったんだ。

その後かおる叔母さんが、母さんの代わりに僕を養育してくれたんだ。そのおかげで大学を卒業でき、大学の先生になれた。そして勤務地の金澤で石川県原爆被災者友の会の会長に選出されて、被爆者運動にかかわるようになったんだよ。定年になって千葉県に移り住んで、今は被爆者の全国組織である日本原水爆被害者団体協議会の事務局次長を務めることになった。その間にも多くの被爆者と同じように原爆被爆の影響で晩発性放射線障害のガンや原爆白内障にもかかった。中でも前立腺がんは、薬物療法による治療を受けて、体内にガン細胞をかかえたまま、運動に努めているよ。繰り返すことは、決して許されないことだから。

でも僕たちが体験したことよりも、原爆は、もっともつとひどくつらい体験を被爆者に与え続けているんだ。そのような被害を、僕たちの子孫、そし

て日本国民、さらに人類の上に、再び繰り返させたくない。だから「再び被爆者をつくるな」と核兵器の廃絶を訴え、国が、その「証」として戦争被害、原爆被害に対して将来にわたって補償することを求めて頑張っているんだよ。二〇二〇年には核兵器を完全に廃棄させようという運動が進められている。その目標が達成されたなら、その時には、母さんたちと一緒に上空に上ってお星さまになりたいね。(いわさ みきそう)

### 叙事川柳の紹介にあたって

和川柳社代表 岡田一杜

「和」川柳社の創立は一九五五年(昭和三十年)五月一日、「川柳和」創刊をもって始まりとします。以後五十六年を経ましたが、私たちは一貫して、かつて鶴彬が主唱した「川柳は風刺短詩である」ことを継承した作句に心がけております。だから短歌や俳句に川柳の多くも叙情詩であるのに、私たちは叙情を否定して叙事詩としての川柳創作をめざしています。もともと江戸時代の前句付文芸から出てきた川柳ですが、その前、室町時代に山崎宗鑑らによって起った俳諧に始まりがあるわけで、この俳諧の精神は雅をもどく(批判する)ことにあつたと言われています。

今日の娑婆は不祥事不公平の氾濫であり、矛盾の坩堝の感があります。これらの事象を捕えその原因に眼をそそぎ風刺の炎で作句するのが叙事川柳で

す。

私たちは川柳文芸をつくるに際して、単に面白く笑しいことにも、時に起こることすなわち時事の描写的作風の時事川柳にも一線を画して、広い視野と深い思いの中からの川柳詩を探索しております。

\* \* \*

和例会・宿題「知らぬ顔」

前田大峰 選

人位

菅総理牛飼いのことは知らん顔

和子

レベル七知らんふりして大被曝

啓

マニフェスト知らん顔して生き続け

茂明

二重ローン解決させず知らん顔

和子

地位

子供らのセシウム被爆知らぬふり

啓

ヤラセの手ボロ出てなおも推進派

迷天使

明るみが出るまで知らぬ顔で居る

一杜

天位

沖縄の負担増には知らんぶり

林

軸

知らぬ顔して神の仕業としらばくれ

《非核平和・行事予定》

- ・八月二十七日(土)いしかわ県民教育文化センター『夏の交流研究会』九時～一二時一五分：分科会、一三時二〇分～一六時：講演と対談「いのちの重さと輝き」上野創／金森俊朗・後援は北陸学院大学公開講座・北陸学院大学
- ・八月二十九日(月)一八時半：原水爆禁止世界大会報告会・石川勤労者医療協会会館

・九月一日(木)一八時：非核石川の会常任世話人会

・九月六日(火)一二時半：街頭署名・Mザ前

・九月八日(木)一八時三〇分～二〇時：日米安保条約調印六〇周年あらためて安保を考える学習会『原発、

沖繩、核、TPP、安保・いま私たちのすすむ道は』

講師日本平和委員会常任理事川田忠明氏・主催安保

破棄石川県実行委員会／石川県平和委員会・近江町

交流プラザ四階

・九月一七日(土)一三時半：『原発からの撤退を』講師

吉井英勝衆院議員 主催石川革新懇・原発問題連絡

センター・日本共産党県委員会 金沢歌劇座

・九月二三日(休)一四時：石川県保険医協会主催「原

発・いのち・みらい」講演会(講師 松井英介・岐

阜環境医学研究所所長・医師) 近江町交流プラザ

・一〇月二日(日)：第六回石川県社会保障学校・一〇時

～一二時記念講演「生きがい、希望の持てる社会を

めざして」講師 湯浅誠反貧困ネットワーク事務局

長・一三時～一六時分科会と講座・石川県社会福祉

会館

・一〇月六日(木)一二時半：核廃絶街頭署名・Mザ前

・一〇月二二日(土)～二三(日)：第四六回全国学童保育

研究会・主催全国学童保育連絡会／石川県学童保

育連絡会・金沢大学構内

・一一月三日(休)二三時：九条の会・石川ネット主催「輝

け九条！平和憲法公布六十五年記念石川県民集会」

県教育会館ホール

・一一月六日(日)一三時：皆保険五十周年共同企画「い

のち・国民医療を守れ」トーク」&「いのちの

山河」上映・県立音楽堂邦楽ホール

・一一月九日(木)一二時半：核廃絶街頭署名・Mザ前

・一一月一九日(土)：九条の会全国交流会・東京

・一一月二五日(金)～二七日(日)：日本平和大会・沖繩

・一一月六日(火)一二時半：核廃絶街頭署名・Mザ前

・一一月八日(日)一三時～一六時半：映画『荒木栄の

歌が聞こえる』を観て歌おう！うたごえの集い・金

沢市民芸術村パフォーミングスクエア

《編集後記》

◎世界大会の参加報告を冒頭に、総会記念講演、国民平和大行進、ヒバクシャからの手紙、叙事川柳など時節柄、濃い内容になりました。どこをどう削るか、とても頭がイタイ号でした。また講演内容は、録音から文章化されたものを定形先生ご本人に見ていただいたものを掲載しました。

◎前号の意見と感想が届きました。感謝致します。

「難しくなっている」とのご指摘もありました。編集委員会としては、《なぜ今この記事なのか》

ご理解いただけるように、また身近なものに感じて

いただけるように、《活動のあるところ》に会報はあ

る》立場で、丁寧に努力したいと決意しています。

◎「米国の未臨界核実験に強く抗議する」声明を別

紙の通り発しましたのでご報告します。(ま)

◎本号から和川柳社(岡田一杜代表)のご好意によ

り、叙事川柳を連載することになりました。八面に

掲載した「人位」「地位」「天位」は句会での順位で、

「天位」が最高位です。「軸」は選者の句です。鶴

彬の作句を継承した和川柳社の皆さんの叙事川柳

にご期待ください。(か)